

I 部 常識に対する疑いが社会を前進させる

01

世の中を見る三人の視点

連載二〇〇回

一九九五年四月に始めた『週刊ダイヤモンド』誌のこの連載が、今回で二〇〇回になった。ご愛読いただき、応援してくださる読者の皆様に、心から御礼申し上げます。

先日ある雑誌で、「至福のときはいつか」というアンケートがあった。「文章を書いているときがいちばん楽しい。会議や事務処理や連絡に妨げられず、一日中集中できたら最高」と答えた。われながらキザな答えだと思いつつ、遠慮して書いたのだが、これは事実である。

文章を書くといっても、さまざま機会がある。では、それらのうち、どれがいちばん楽しいか？ 映画「ローマの休日」で「いちばん思い出に残った街は？」と聞かれたときのアン王女の答

え“Each in its own way...”を真似して言えば、どれもがそれぞれに楽しい……だが……この連載は最高だ！ アン王女の「ローマ」と同じである。

とくに、メールやお手紙でさまざまな反応をいただくのが嬉しい。『週刊ダイヤモンド』誌の読者諸氏は、日本で最も質が高いと思う。そうした方々に向かって語り続けることができるのは、本当に恵まれたことだ。

本を読むより書くほうが楽しいと思うことも多い。DVDで映画を見るのも楽しいが、見終わってももの足りなさを感じることもある。それよりこの連載を書いているほうがずっと楽しい。

粗削りの骨格が出来上がったあと、散歩をしながら細部を思い出し、練り直す。夜、本当は片づけなければならぬ事務的雑事や連絡事項があるのだが、それらには不義理をして、書き続ける。「神様、どうか明日までの数時間を自由に使わせてください。この自分勝手によって不都合な事態が起きませんように」と祈りつつ。たまには、用事が片づいていて数日間を堂々と使うことができる。アンケートに書いた「至福の時間」とは、こうしたときのことである。

仕事に集中してから寝ると、寝ているうちにアイデアが出る。人間が睡眠中に思考するというのは、本当だ。ただし、起きるタイミングが重要で、寝すぎると忘れてしまう。また、目覚めてからしばらくすると、跡形もなく消えてしまう。そこで、アイデアを逃さないよう、枕もとに紙とペンを置いてある。

雑誌版の壁新聞を作る

一〇〇回記念の際に、「大変苦勞して書いている」と述べた。「地獄の綱渡り」とも言った。同じ苦勞はいまでも続いている。

体調を崩したときや緊急の用事が発生したときは、締め切りまでに書き上げるのが大変だ。そうしたときにあわてないよう「貯金」をつくっておくべきだと思っただが、なかなか実現しない。締め切りのある週にならないければ、書く気になれない。綱渡りの曲芸はいまも続いているわけだ。

一〇〇回記念のときに「テーマの選択こそ重要」と書いたが、これは変わらぬ真理である。テーマさえ決まればあとは楽だ。もっとも、だいぶ書き進んだあとで没にし、別のテーマに切り替えることもある。

今年の最初の回（二〇〇三年一月）では、「日本経済の将来に希望を」という内容のものを三通り書いたのだが、どうしてもウソ臭くなつて、すべて廃棄してしまった。

イラク戦争が始まったときに書こうとしたのは、原油価格の問題だった。資料を集め原稿も半分近く書いた。しかし、主張点が何かが自分でも分からなくなつて、これも廃棄した。

その頃、日本の報道機関の国際競争力について感じるが多かった。書くことがややためらわれたテーマではあったが、「ウソ臭い」内容のものより、それについて素直に書くのがよいと悟り、



ここにこもって仕事をしているときが最高の時間。北向きの部屋なので日光の具合に邪魔されずに没頭できる。昼も夜も、夏も冬もほぼ一定の環境

方向転換した（本書の24「メディアの国際競争力」を参照）。私のパソコンのなかには、途中まで書いて没にした原稿が、これら以外にもたくさん眠っている。

これまで一九九ものテーマをよくぞ見つけられたものだと、われながら感心する。テーマが見つからずあせることはいまでもあるが、最近では、むしろ書きたいテーマが順番待ちの状態だ。

ただし、それらをいつでも書けるといいうわけではない。古い映画や古典となった書籍について書くのは唐突に思われるのでは、と危惧されるからだ。そこで、これらを書くことを正当化する理由はないかと、ウの目タカの目で探している。

ビリー・ワイルダー監督が亡くなったときは、（監督には大変失礼ながら）チャンス到来と、「昼下がりの情事」を取り上げた。先日は、ジョージ・ロイ・ヒル監督の死去で、「ステイキング」について書いた。もつとも、同じ監督の作品ばかりを取り上げるわけにはゆかない。彼らの他の作品について書く余裕がなかったのは、大変残念だ。

「話したい」という欲求は、不思議なものだ。こういう欲

求を持つ生物は、人間だけだろう。兼好法師も、「おほしき事はぬは腹ふくる、わざなれば」(思
い浮かぶことを言わないのは、腹がふくれるようにいやなことだから)と言っている(『徒然草』
第一九段)。長屋の井戸端会議も、サラリーマンの飲み屋談義も、こうした欲求の表われだ。

私自身はといえば、小学生のときに、壁新聞を作って教室の壁に貼っていた。学生時代にはダベ
リングが大好きだった。最近では、出版社の編集者の方をつかまえ、本来の仕事の話をそっちのけ
にして、つぎからつぎへと話が発展してしまうことがある。

ただし、私の場合の「おほしき事」は、嫁や上司の悪口ではない。ささやかな発見を知ってほし
いとか、感動や憤りを共有してほしいということだ。その意味での違いはあるが、本質は同じだ。
だからこの連載は、「文字版の井戸端会議」であり、「雑誌版の壁新聞」である。

もちろん、商業誌での連載である以上、私の楽しみだけのために書くことは許されない。読者に
とって「面白くてためになるもの」でなければならぬと自覚している。

「あるべきものがない」というホームズの視点

では、私が提供できるものは何か。私は取材活動をしているわけではないので、一次情報を提供
することはできない。

私が提供できるのは、「視点」だ。世の中を見るための「めがね」と言ってもよい。多くの人が

特定の考えにとらわれているとき、「別の角度から見ると、まったく違う像が見える」と指摘するのが私の役割だと考えている。

情報提供の分業体制のなかで、各情報提供者が自らの役割を正しく自覚することは、大変重要だ。実際、本当の一次情報でなければ、情報そのものの価値は減った。インターネットで大量の情報が入手できるようになったからである。

それにもかかわらず、外国との言語差が大きい日本では、いまでも、横文字を縦に直すだけで「情報提供」と考えられている。

今回のイラク戦争でも、これを痛感した。最前線からの最新ニュースか、そうでなければ本当に価値のある解説や分析でなければ、本当は意味がないと思う。「アンマン発」という現場感（本書の24参照）も、ワシントンの新聞の要約も、現代の世界では不必要なのだ。視点ということについて、私が模範にしたいと考えている人を三人挙げよう。

最初は、シャーロック・ホームズだ。『銀星号事件』(Silver Blaze)で、現場の聞き込みを終えたホームズは、「あの晩の犬の不思議な行動に注目すべきです」と言う。「犬はな



文庫本専用の書架(自作)。ちょうどの大きさ

にもしませんでした……」というグレゴリ警部の答えに対して、「それが不思議な行動なのです」と指摘する。

犯人が侵入したとき、普通なら犬が吠えたはずだ。ところが、それを聞いた人は誰もいない。そこにこそ問題を解くカギがあるというのが、ホームズの考えだ。

目の前に示されたものは、誰でも注目する。しかし、「あつてしかるべきものがない」というのは、なかなか気づかない。そして、「ないこと」には十分な理由がある。それは、しばしば決定的な理由だ。事実ホームズは、「深夜に犬が吠えなかったのは、侵入者が犬のよく知っている者だったから」と推論し、見事に犯人を突きとめる。

旧ソ連時代のクレムリン・ウオッチャーは、プラウダの記事に誰の名前が「ないか」に注目した。あるいは、レーニン廟に並ぶ指導者群のなかに誰が「いないか」を問題にした。「いるべき人」がいなければ、粛清された可能性が強い。

私もこのような視点を提供したいと考えている。公表される経済データに表れない変化は何か、業績悪化した企業が公に認めない本当の原因は何か、……等々。

ツバイクの「唯経済的」観点

二人目は、シユテファン・ツバイクだ。彼は、『マゼラン』のなかで、十字軍遠征も大航海も、

「アラビア人に邪魔されずに香料をヨーロッパに運ぶ」ための経済的行為だったと言っている。つまり、聖地奪還やキリスト教伝道は、ベールにすぎないと言うのだ。前にこの連載で、これを「唯経済的観点」と名づけた（「唯物的」をもじったもの）（拙著『日本にも夢があるはず』、ダイヤモンド社、二〇〇二年、13「テロに関する『唯経済的』考察」を参照）。

これはまず第一に、おかしいとは思いつつ、誰もが反対しにくい建前の公式論への批判だ。聖地奪還や伝道という目的を否定するのは、キリスト教社会では大変難しいことだろう（ツバイクはユダヤ人）。

日本の社会にも、神聖化され反対しにくい命題がある。戦前でいえば、皇国史観だ。現在でも、「政治的に正しい」（つまり、「唯経済的」には誤りの）命題はたくさんある。

たとえば、企業の社会的責任論だ。私の考えでは、企業の社会的責任とは、製造業の場合なら、安くて丈夫な製品を作って利益を上げることだ。

それにもかかわらず現実には、企業の社会的責任がかしましく言われる。そして、昨日まで社会的責任論を喧伝していた経済界から、株価が下がるから株式への課税をやめよとか、減損会計の導入を延期せよという提案が平気で出てくる。昨日までは「従業員は家族」と言っていた企業が、業績の悪化で冷酷な首切りに乗り出し、退職金を削減する。そして、金利減免や徳政令を要求する。ついには、国が乗り出して破綻企業を助けることになってしまった。

「唯経済的」観点は、第二に、歴史的背景や民族的特殊性といった説明に安易に頼ることへの批判だ。たとえば、「日本の企業は農耕民族たる日本民族の性質に合ったものだから、アングロサクソン流の合理的な仕組みに変えることはできない」といった類の説明である。私の考えでは、こうした説明はどんな結論をも正当化しうるものであり、したがって、現状維持のための道具にほかならない。

最近の日本では、「唯」経済的どころか、経済的視点をまったく欠いた考えが横行している。経済現象を経済的に見ず、金融現象をファイナンス理論に見ない人が多すぎる。

その典型例は、先日の大手都銀の巨額増資だ。ビジネスモデルが変わらない限り、時価総額は一定に保たれるはずだから、増資は株価を引き下げる。これは、当たり前結論だ。金融を業とする企業がそのことに思い至らないのは、驚きとしか言いようがない。

経済政策論議にも、経済的な視点がない。緊急株価対策など、批判することさえ馬鹿らしくなる内容だ。原稿のタネが尽きないという意味ではありがたいが、この連載でやり玉に挙げるべきが尽きなければ、欲求不満で腹がパンクしてしまうだろう。

絵の背景に興味を惹かれる

模範にしたいと考えている人物の三人目は、妙な言い方だが、私自身である。ただし、絵を見て